

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.160 2009.1.1



松本民芸館では、毎年12月中旬に「お正月飾りと初音づくり」の講座を開催しています。初音は今では懐かしくなりましたが、戦前までは正月の縁起物として、除夜の鐘とともに「初音く初音く」と売り始められました。「早く春が来るように」そんな願いが込められていたのでしょうか。

正月飾りと初音づくり



もくじ	誌上博物館◇平成21年松本あめ市歴史展示 企画展「商都 松本の繁盛記～江戸時代の商品流通をさぐる～」	2-3
	おいべす様の顔かくし 一知られざる小正月行事の探訪	4-5
	博物館のノートから◇企画展「物から探る縄文人の交流」を開催して	6
	TOPICS◇「どくとるマンボウ昆虫展」開催される	7
	ガイドコーナーはてんぼく	8

平成21年松本あめ市歴史展示

企画展「商都 松本の繁盛記 ～江戸時代の商品流通をさぐる～」

はじめに

江戸後期、天保14年（1843）に書かれた『善光寺道名所図会』には、当時の松本の様子が次のように書かれています。

「…城下の町広く、大通り十三街、町数およそ四十八丁、商家軒をならべ、当国第一の都会にて、信府と称す、相伝ふ牛馬の荷物一日に千駄つけ入りて、また千駄つけ送るとぞ、実に繁盛の地なり…」

松本は、物資と人の出入りが信州で最も活発な「商都」として表現されています。では、いったいなぜ信州第一の商業都市に発展することができたのでしょうか。残された史料と発掘調査出土品から、その理由を探ってみます。



写真1『善光寺道名所図会』初市の様子（部分）

1 発展の背景には 驚異的な流通革命があった!?

江戸時代、城下町の主要な商家の大部分が問屋を営んでいました。こうした問屋は、松本近隣で生産された作物を他地域へ販売し、他地域から運び込まれた物資を領内や周辺地域へ販売していました。

商品作物の増加に伴って流通が盛んになると、そうした商品を輸送するのに馬を用いた「中馬」の需要が寛文期（1661～1673）以降に急激に増加していきます。中馬は、もともと農耕馬を利用して運搬する農民たちの副業として始まりました。農民たちにとっても、現金収入を得る手段であり、商人と農民の思惑が一致して、一気に広まっていき

ました。中には、専門的に荷物運搬に携わる者や、荷物の仲買も行う大規模な中馬経営にのりだす者も出現してきました。

ところで、当時の運輸に関しては、幕府や藩の決められた機関が特権をもっていました。こうした機関が行っていた公的な運送制度とは、街道の宿場ごとに問屋場で荷物を積みかえ、運賃もそのたびに交渉するという非常にわずらわしいものでした。このため、商人たちは宿場に関係なく、一気に商品を目的地まで運搬できるスピーディーな中馬を歓迎して用いることとなります。

しかしこれに対して、公的制度下の宿場問屋は、既得権を守ろうとしてしばしば大きな争いが起きました。当初、中馬の活動は公的には無認可の営業でしたが、幕府も次第に拡大していく「ニュービジネス」の収拾にのりだし、幕府公認の運輸機関として藩政にとりこまれていきました。

このように江戸時代には、「中馬」というそれまでになかった新たな宅配便業が出現することにより、驚異的な流通革命が起きていたのです。松本の商人たちは、こうした中馬を上手く使い、商業発展につなげていったのです。

2 交通網の充実 ～街道の接続インターとして 物資と人が集まる～

江戸時代初期、幕府は五街道と呼ばれる幹線道路を整備しました。そのうちの一つである中山道が、松本藩領の塩尻・洗馬・本山宿を通過しています。中山道は、江戸日本橋を起点に、近江国（滋賀県）草津で東海道と合流する主要な道路でした。その中山道の洗馬宿（塩尻市）からは、松本城下を通過して、善光寺（長野市）方面への善光寺街道（北国西街道）が通っています。さらに、松本から日本海側の糸魚川（新潟県）へは千国街道（塩の道）、太平洋側へは塩尻宿を経由して三河国（愛知県）岡崎へ通じる三州街道が延びていました。その他、上田方面へは保福寺通り、飛騨（岐阜県）高山へは野麦街道…というように、たくさんの街道が集まっていました。

松本の問屋は、こうした街道を利用して、販売網を広げていきます。江戸後期の松本の特産品は、煙草・麻・蚕糸・漆・紙・木綿・足袋・押し絵雛などがあげられますが、こうした商品の取引先をみると、善光寺（長野）・上田・倉賀野（群馬県）・飯田・中津川（岐阜県）・名古屋（愛知県）・岡崎

(同)・吉田(同)・新城(同)・甲府(山梨県)・糸魚川(新潟県)など、かなり広範囲に及んでいました。

このように松本は、日本海側と太平洋側を結ぶ中間地点、東国と西国を結ぶ接点など、街道の接続インターとして、物資と人が集まる集散地としての位置付けが確立していったのです。この結果、城下においては生産地と消費地を結ぶ荷問屋をあきなう商家が多くなっていきます。

こうした荷問屋の活動の様子を明らかにする良好な事例が、松本城下町の発掘調査にあります。松本城下町跡本町第4次調査では、4,859点の未使用の砥石が火災で被熱して商品価値を失い、すべて廃棄された状態で発見されました。それらの砥石の特徴や材質から、幕府御用砥石の群馬県南牧村砥沢産のものであることが判明しました。史料の検討から、城下に上野砥石問屋が1軒あったこと(「松本市中記」)、松本から飯田にむけて中馬を用いて上野(群馬県)産の砥石が大量に運ばれていたことなどがわかり、調査地が砥石問屋跡だったことがほぼ確定的となりました。松本の砥石問屋が上野国から砥石を仕入れ、松本城下で売るだけでなく、飯田など他の都市へも多量に販売していたという問屋の様相が判明したのです。



写真2 砥石の出土状況

写真3 砥石の梱包

3 特産品ブランドの確立! 生坂の煙草

江戸時代、松本から販売された商品の中に、全国的な有名ブランドになったものがあります。現代では、健康・禁煙ブームで嫌煙されがちな「煙草」です。

煙草は戦国時代末期に、ポルトガル人、もしくはイスパニア人によって日本に伝えられたと言われています。松本地方では、慶長年間(1596～1615)に上生坂村(現東筑摩郡生坂村)照明寺の住職良憲が長崎から種を持ち帰り、寺で栽培したことがはじまりと言われています。その後、江戸期に喫煙の習慣が広まり、これとともに煙草栽培も広がっていききました。享保9年(1724)に編纂された『信府

統記』には「上生坂村、この所は松本領たばこの出る地、信濃生坂たばことて、今は名物の数にも入る…」という記述がみられます。

宝暦13年の松本城下から中馬によって運ばれた荷物をみると、煙草・酒・麻・米・小麦などの品物のうちで、運搬量が最も多かったのが煙草でした。当時は葉煙草のまま販売先へ運搬していましたが、安永期(1772～81)に泉州(大阪府)堺から煙草を刻む包丁を導入し、生産地で刻み煙草に加工して出荷するようになりました。刻み煙草は、松本から上田・高崎へ陸送し、倉賀野から利根川の水運で江戸へ出荷するようになりました。

江戸では「生坂切粉(きざみ)」「信州切粉」などと呼ばれて人気を呼び、江戸に運ばれる煙草量全体の20%を占めるまでになりました。生坂煙草は、ほどほどに味が良くて安価であったため、大消費地江戸での販売を確立し、全国的に有名な銘柄となっていきました。この結果、煙草集荷地であった松本城下の煙草問屋数は、元禄・享保期(1688～1735)は8軒でしたが、宝暦・明和期(1751～71)は12軒、文政期(1818～29)は37軒、嘉永期(1848～53)は41軒、といちじるしく増加していきました。

その後、明治初期まで煙草生産は盛んに行われましたが、明治20年代以降になると、近代製糸業の発展を背景に、煙草畑の多くが桑畑へと転換され、江戸時代に隆盛を極めた煙草生産は減少していききました。

おわりに

これまで見てきたように、商都・松本の発展は、流通機構の発達なしにはあり得ませんでした。その結果、煙草に代表されるような全国的な販路をもつ特産品(他には、関東から東北地方まで販路を拡大した足袋底など)が登場します。こうした流通の拡大・活性化により、商都・松本には様々な情報やモノが集積され、その結果、新たな産業・文化が形成されていきました。「松本」の商業・産業文化の一面は、こうして完成されていったのです。

(時計博物館 学芸員 / 竹内 靖長)

本稿に掲載した内容は、平成21年1月6日(火)～2月8日(日)に時計博物館で開催する平成21年松本あめ市歴史展示、企画展「商都 松本の繁盛記～江戸時代の商品流通をさぐる～」でご紹介します。

〈註〉当時の運搬には、中馬に代表されるように、多くが馬を用いましたが、急峻な場所(千国街道の大町以北や、野麦街道など)では牛が用いられました。

おいべす様の顔かくし

—知られざる小正月行事の探訪—

はじめに

「おいべす様の顔かくし」って何？と、みなさん
 思いのことでしょう。私もそうでした。

我家で、祖母の書きつけの1月14日のところに、
 「おいべす様のかおかくしを取りかえ」という文字
 を見つけたのは、10年ほど前のことです。「いったい、
 何のことだろう？」その疑問を何人かの人によつ
 けてみましたが、答えは返ってきませんでした。

本稿は、以来10年間に私が見つけた「おいべす
 様の顔かくし」の手がかりをご紹介します、さらなる
 情報をお寄せいただくという、「収集」を目的と
 する新スタイルの誌上博物館です。

1 文献を探す

「おいべす様」が、えびす様であることは容易に
 想像がつかます。えびす様は、神棚とは別に勝手
 などに祀る所もあり、親しみが感じられる神様です。

『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』の第3巻現代下
 (1965年。以下、『郡誌』と略記します。)に、「正月
 十四日夜、恵比寿の絵の上に紙で福槌・巾着を切っ
 て貼る恵比寿様の顔かくしの行事」が、洗馬や
 朝日で行われていることが記されています。『朝日村
 の年中行事』(1998年)には、1月20日に「おい
 べっ様の顔かくしといってえびす様の飾りわくに
 紙を張る」と見えます。

この「おいべす様の顔かくし」探索のわずかな
 手がかりのうち、『郡誌』の「福槌や巾着を切って
 貼る」という記述から、「顔かくし」は切り紙であ
 ることが推測されます。しかし、文字ばかりの
 記録では、どういう行事なのかイメージできません。

しばらくして、兵庫
 県の西宮神社で権宮司
 をされている吉井貞俊
 さんの『福の神えびす
 さんものがたり』(戎光
 祥出版・2003年)とい
 う本が出て、そのなか
 の「江戸時代からの
 重ね紙」という項が目
 にとまりました。長野

県原村の中新田で、今も顔かくしの行事が行われ
 ていると、「長野日報」の記事を添えて紹介されて
 います(写真1)。西宮神社から取り寄せた「恵比
 須と大黒天」のお札を、「各家々でその前年のお札
 の上に重ね」て貼り、「お札の上には『顔かくし』
 と呼ばれる切り絵で覆い、神棚にまつる。」とあり

ます。写真も添えられており、顔かくしの紙には
 「2000」の数字と干支の辰の図柄が切られています。
 これは、図柄こそ異なりますが、『郡誌』に記され
 た「恵比寿の絵の上に紙」を「切って貼る」行為
 と同じです。ここで、ようやく「おいべす様の顔か
 くし」の行事がイメージできました。

「おいべす様の顔かくし」という行事は、どうや
 らふたつの違ったやり方あるようです。ひとつは、
 『郡誌』に記されたえびす様のご神影に切り紙を貼る
 もの、もうひとつは『朝日村の年中行事』の神棚
 の枠に紙を張るものです。私の家で行われていた
 行事は、「取りかえ」という表現から、原村の
 事例のように毎年お札を貼り重ねていくやり方とは
 違うと推測されます。以来、松本平では、原村とは
 少し違った行事が行われていたのではないだろうか、
 と漠然と思っていました。

2 実物の出現

そして、平成
 18年に松本
 市立博物館で
 開催した「祈
 りと偶像」展
 で、ついに、
 これこそ「お
 いべす様の顔
 かくし」だと
 確信する資料



写真2 田中家の神棚(右奥)

(写真2)に出会いました。資料名は、「田中家の
 神棚(恵比寿・大黒)」とされていました。それは、
 平成17年に、巾上の田中さんのお宅から、博物館
 に寄贈されたものでした。当時、私は時計博物館
 の所属で、たまたまその話を博物館に仲介しまし
 ましたが、資料を見たのはそのときが初めてでした。

この資料は、『朝日村の年中行事』に記されるよ
 うに、えびす様の飾りわくに、紙を張ってあります。
 紙はすだれ状に切られ、神棚の中が透かして見え
 ます。その紙をめくりあげると、飾り枠の中には
 えびす・大黒のご神影が収められています(写真3)。
 「福槌や巾着」の切り絵ではありませんが、「恵比
 寿の絵の上に紙」を貼るという『郡誌』の記述に
 も通じるものがあります。

平成20年の3月、田中さんから「3年前に寄贈
 した雛人形を見たい」との申し出があり(書類上
 の寄贈者は田中さんの義兄さん)、田中さんと話を
 する機会が巡ってきました。田中さんの資料寄贈



写真1 『福の神えびすさんものがたり』

の話は、本町のある人形店を経由してきました。寄贈資料は、古い雛人形ということでした。「おいべす様の顔かくし」は、雛人形と一緒に寄贈された、その他の資料のうちのひとつだったのです。



写真3 切り紙の奥のえびす様

田中さんの家では、北向きの神棚に、枡に入ったえびす・大黒の像を祀っていたそうです。また、切り紙は節分のときに取り替えたそうです。なぜそうするのか、詳しいことは分からないということですが、島内の実家でも1月14日に、えびす様の神棚の切り紙を張り替えていたそうです。

えびす棚のお供えは、女性がやるものではないといい、また「供え物は未婚の女性が食べると縁遠くなる」といい、避けた」と話してくれました。

3 えびす様を隠すわけ

「おいべす様の顔かくし」という行事は、えびす様のご神影に紙を貼ったり、神棚の枠に紙を張ったりしていることから、えびす様を隠すことを目的とした行為であることが想像されます。それでは、なぜ、えびす様を隠すのでしょうか。

『福の神えびすさんものがたり』には、全国のえびす様の祀り方が紹介されていますが、「顔かくし」は他の地域には見られません。えびすという神様は、その土地によって性格が異なります。都市部では商売の神様として信仰されていますが、農村では農業の神様、漁村では漁業の神様として信仰されています。松本あめ市の祭神である市神様もえびす様で、商売繁盛の神から福の神への発展がうかがわれます。「商売繁盛で笹持って来い」の掛け声で知られる大阪の今宮戎神社は最たるもので、1月10日を中心とする十日戎では、境内で受け取った笹に商売繁盛の願掛けや一年の幸運を願い、福娘に様々な縁起物を付けてもらいます(写真4)。

しかし、松本でえびす様の祭りといえ、11月20日の恵比須講が最大の行事です。かつて、恵比須講の大売出しには、1年の収穫がひと段落した近郊の農村から、大勢の人が買出しに来たといいます。『朝日村の年中行事』には、「えびす様は、一月二十日に稼ぎに出て十一月十九日に稼いで帰って

くると言う」とあります。11月19日は、1年間稼ぎに出ていたえびす様が帰ってくる日とされており、恵比須講で新しいご神影を得て



写真4 今宮戎神社の福娘

えびす棚にお神酒や灯明を上げ、1升枡に米を山盛りにしてその上に財布を載せるなどして、えびす様が稼いできた姿を表したのだといいます。

えびす様が稼ぎに出かけるのは、二十日正月といって、正月の終わりとされる1月20日です。正月の終わりとともに、えびす様は稼ぎに出かけるのです。そこで、今度はえびす様を隠す必要が生じるのです。福槌や巾着を切り、えびす様がたくさん稼いでくるようにとの願いを込め、えびす様を稼ぎに送り出すのが「おいべす様の顔かくし」なのです。ここには、農業神としてのえびす様の姿があります。

おわりに

『松本のあめ市 その歴史と起源』(松本あめ市実行委員会編・1997年)によると、文政10年(1827)の高美甚左衛門の日記には「明朝、丁内で市棚や御顔かくしを売る商人が用意のために宿泊する」というくだりがあるそうです。明朝というのは1月11日の朝のことで、「御顔かくし」はえびす様の顔かくしのことと思われます。

江戸時代の後期には、「顔かくし」の紙を売る商人がいたのです。専門に売るので、切り紙と思って間違いないでしょう。切ったのは、仙台藩の正月の「きりこ」のように修験者かもしれません。近郷の農村から来た人たちが買い求めたのでしょう。

この日記から、「おいべす様の顔かくし」という行事は、200年ほど昔の松本周辺でも行われていたことがわかります。今では知る人も少なくなった「おいべす様の顔かくし」の行事を、せめて伝承だけでもしていきたいと思い紹介させていただきました。「今でもやってるよ」という方がいらっしゃいましたら、情報をお寄せいただければ幸いです。

(旧制高等学校記念館 学芸員 / 木下 守)

企画展「ものから探る縄文人の交流」を開催して

学芸員として考古博物館に勤務するようになって2年目。まだまだ新米ですが、考古学を学びながら、自分で企画した展示や講座を通して、たくさんの人びとと出会えるこの仕事は、素敵だなあと魅力を感じています。

学芸員と言っても、その仕事の幅がとても広いことを日々実感しています。博物館では年間を通して様々な講座や展示を企画しますが、学芸員が一番力を入れるところ、またその力が評価されるのが企画展示なのでしょう。私の場合、この秋に開催した企画展が、自身で企画し展示までを行った初めての展覧会でした。準備から展示撤収までの流れの中で、色んな初体験もありました。

その体験談を、ここで少しご報告したいと思います。

他博物館の資料を借用する

今回の展示では、比較資料として他の博物館の資料の展示を試みました。様々な場所から、たくさんの情報や資料を収集しようとする展示には、豊富な知識も必要になります。もちろん、当館でも何万点という資料を収蔵しているのですが、それ以外のさらに膨大な資料の中から、今回のテーマにふさわしい数点を選び出す…、これが一番悩んだところかもしれません。とにかくひたすら文献をあさりました。

文献から選んだ資料の状態を把握するため、事前に調査に訪れました。資料によって運び出しが困難なものもあります。今回は大きめの土器を中心とした資料を借用しましたが、元々バラバラで見つかった破片を復元したものなので、当然壊れやすいものが多く、取扱いは要注意です。

実際、文献で見たイメージと実物がかなり異なっていたので、事前調査は不可欠ですね。

プロの梱包と運搬

学芸員が梱包から運搬まで行うケースも多いのですが、今回は美専車（美術品輸送専用車両）での運搬、美術品等の資料を扱う専門の方の手で、梱包から運搬まで行いました。

資料の運搬の際に重要なのは梱包です。梱包の材料も実に工夫されています。資料の形状や状態に合わせて梱包の仕方も変わるので、できあいの



写真1 梱包の様子

ものだけでなく、時にはその場で製作して対応します。

運搬に使う美専車（写真2）。庫内には固定器具がついていて、温度や湿度まで管理できます。揺れを吸収し、できる限り資料に負担のかからない構造になっています。

今回高山市から借用したかなり繊細な土器も、荒れた道のりの中、安全運転で無事に運搬していただきました。



写真2 美専車

展示する

展示台、エサフォーム、パネル、ウーペケーネス…、展示のアイテムはたくさんあります（写真3）。資料をただ平面に並べただけではつまらない、この材料をどう生かそうか。

資料の置き方ひとつで見える人に残る印象もかなり違います（写真4）。

博物館に勤務するようになり、展示の見方が少し変わりました。資料の展示の仕方や照明、ケースなど、担当した学芸員によって色々な工夫があります。そんな裏側のことも意識しながら展示を見るのも、また違う楽しみ方ができるのではないのでしょうか。



写真3 展示のアイテム



写真4 展示の工夫

時間的に不安を感じつつも、何とか予定通り開催し、無事に展示撤収まで終わることができました。

終了間際に「明日までですよ！」「まだやっていきますか！？」という問合せも何件かいただき、ひそかに嬉しさを感じていました。

他の博物館の展示を見たり、ベテラン学芸員さんの話を聞いたりすると、学ぶことや足りない部分もたくさん見えてくるのですが、やはりとても魅力的な仕事です。これから、もっと腕を磨き、楽しみながら、その楽しみが皆様の心に伝わるような企画をしていきたいと思っています。

（考古博物館 学芸員 / 平田 明日美）

「どくとるマンボウ昆虫展」開催される

私がはじめに「どくとるマンボウ昆虫展」の存在を知ったのは、平成20年3月、NHKの記者斉藤氏から電話で取材の依頼をいただいた時です。取材内容は栃木県日光市で行う「どくとるマンボウ昆虫展」で、北杜夫氏が旧制松本高等学校時代に採集した標本の中に松本市三城で採集された絶滅危惧種のチャマダラセセリの標本が多くあるので、この場所での昔のことを交え、話を聞かせてほしいというものでした。

私は、当時の三城のことはあまり知らず、記者の熱意に取材を引き受けたのですが、幸い入山辺公民館に昭和27年～30年に撮影された写真が残り（写真1）、また当時の文献や以前三城を訪れた方々などの話を合わせ、取材を受け4月2日NHK総合ニュースウォッチ9で全国に放送されました。



写真1 昭和27年の三城

この昆虫展を企画されたのは、栃木県職員の昆虫好きな新部公亮氏です。新部氏は、北杜夫の『どくとるマンボウ昆虫記』を読んで昆虫に興味を抱き、北杜夫ファンになった方で、『どくとるマンボウ昆虫記』の記述に沿い昆虫標本を集めて展示をしたいというのが彼の夢であったと聞いています。

昆虫展は栃木県日光市での開催を皮切りに数か所で開催され、最後は北氏の思い出の地松本で開催したいという新部氏の想いから、10月5日から10月13日まで、懐かしい学び舎であるあがたの森の旧制高等学校記念館で「マンボウ先生の青春」と題してプレイベントを開催し、10月18日から11月16日まで松本市山と自然博物館で本展を開催しました（写真2）。

この企画展開催の2日目に北氏本人が来館されましたが、この来館の立役者はご令嬢の斉藤由香氏です。あまり体調の良くない北氏を、かつて昆虫採集に訪れた思い出深い上高地に案内し、その帰りに「どくとるマンボウ昆虫展」を開催している山と自然博物館に来館したい旨のメールが由香氏から入ったのです。また、文中には今まで報道関係者の取材を一切お断りし、大変失礼をしたので、この機会に報道各社の共同インタビューを受けたい旨が付け加えられていました。

今年3月、自身の企画・制作による報道ニュースを担当したNHKの斉藤記者は、北氏の来松を知り急遽他の取材を代わってもらい、上高地での

様子や、山と自然博物館の昆虫展で北氏自身が採集された標本との対面取材



写真2 山と自然博物館の展示会場

し、この模様は再び全国放送されました。さらに、由香氏は月2回担当されている「週刊新潮」のコラム「トホホな朝ウフフの夜」の中で、山と自然博物館で開催中の「どくとるマンボウ昆虫展」を紹介してくださいました。

このコラムを読んだファンは、関東圏や関西など遠方から見学に来られ、昆虫展を観覧した方はイベントも合わせると1,713人に達しました。北氏のファンの多さに改めて驚かされました。

北氏は昭和20年に旧制松本高等学校に入学し（写真3）、早々に昆虫採集を始めた様子です。インタビューで「好奇心は人間を動かす」とおっしゃっていますが、まさに松本の自然の神秘さに好奇心が掻き立てられたと想像します。

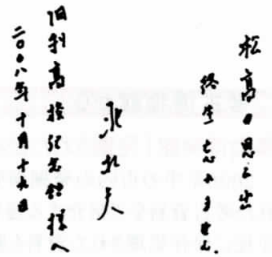


写真3 記念館への色紙

この昆虫展で公開された、松本市三城や島々谷・上高地で採集された600種1,600頭の多くは、旧制松本高等学校在学中の3年間で採集されたもので、採集データから何処で何時どの様な虫を採集しているかがわかります。昭和21年の採集地を挙げますと、4月28日松本市入山辺・5月15日松本市入山辺～王ヶ鼻・6月9日東京都小金井市・6月16日松本市・6月28日松本市入山辺～王ヶ鼻・7月5日山形市上山市・7月7日山形県山形市（？）蔵王麓・7月25日島々～上高地・7月26日上高地・27日上高地～西穂高岳・28日上高地・29日徳本峠～島々・8月11日大町市木崎・9月7日山形県上山市金瓶・9月26日松本市入山辺三城と一年を通して昆虫採集をされていますが、特に今では採集が禁じられている上高地行きは、島々谷から徳本峠を経由し上高地さらに西穂高岳に登り4泊5日の採集行であった事が記録から読み取れます。

81歳を迎えられ、お体の自由が利かなくなられた様子でしたが、来松いただき、改めて北杜夫氏の偉大さがわかりました。

（山と自然博物館 館長 / 丸山 潔）

松本市立博物館から ☎0263-32-0133

新春企画

「おめでたづくし」

会 期 1月2日(金)～2月1日(日) (1月3日は休館)
会 場 博物館2階展示室
観覧料 通常観覧料(大人200円、小人100円)

年中行事シリーズ

「小正月—まゆ玉サービス」

来館者に小正月のつくり物であるまゆ玉を配布します(※なくなり次第終了)。

日 時 1月14日(水) 午前9時30分から
場 所 博物館1階エントランス

旧開智学校から ☎0263-32-5725

特別展「双六」

旧開智学校の所蔵資料に双六が多くあります。双六は、明治、大正、昭和、それぞれの時代背景を映し出しています。山あり谷ありの双六を見ながら、人生について考えてみませんか。

会 期 3月1日(日) まで
会 場 旧開智学校1階特別展示室
観覧料 通常観覧料(大人300円、小人150円)

考古博物館から ☎0263-86-4710

移動博物館「発掘された松本2008」

2008年中の市内の発掘調査の情報や発掘された考古資料をご紹介します速報展です。また、今年度に保存処理された資料も展示します。

会 期 2月13日(金)～22日(日) (月曜日は休館)
会 場 時計博物館3階 企画展示室
観覧料 無料(時計博物館常設展示は有料)

関連事業

松本市遺跡発掘報告会

日 時 2月14日(土) 午後2時～4時30分
会 場 本町ホール(時計博物館4階)
(聴講無料、申込み不要)

旧制高等学校記念館から ☎0263-35-6226

ギャラリー企画展

「地元小中学生が描くあがたの森の風景」Ⅱ

今年は旭町中学校と清水中学校の生徒のみなさんが描いた、あがたの森の風景をご紹介します。

会 期 ①1月25日(日) まで(旭町中)
②1月31日(土)～3月1日(日) (清水中)
会 場 旧制高等学校記念館ギャラリー

第69回 サロンあがたの森

話 題 あめと初市

—松本のあめ市のルーツを探る—

日 時 1月10日(土) 午後1時30分～4時
会 場 あがたの森文化会館1-5教室
話題提供者 木下守

(旧制高等学校記念館学芸員)

空穂記念館から ☎0263-48-3440

伝統文化こども教室(空穂百人一首教室)

日 時 1月17日(土) 午前10時10分～12時
会 場 窪田空穂生家
講 師 寺沢尚武氏
受講料 無 料
申込み 実施当日まで

冬季文化講座「冬ひざし」

期日と内容

1月31日(土) 講師 上條宏之氏
「窪田空穂の自伝を読む
—空穂と交流があった人々Ⅱ—」
2月7日(土) 講師 高田充也氏
「民話あれこれ —松本地域の民話—」
2月14日(土) 講師 青木教司氏
「松本城 世界遺産への道」
2月21日(土) 講師 神津良子氏
「版画家・加藤大道の生涯」
2月28日(土) 講師 臼井和恵氏
「窪田空穂の子どもの歌 —父親空穂に迫る—」

時 間 午後1時30分～3時
会 場 窪田空穂生家
受講料 各回100円
定 員 50人
申込み 1月7日(水) から

時計博物館から ☎0263-36-0969

平成21年松本あめ市歴史展示

「商都 松本の繁盛記

～江戸時代の商品流通をさぐる～」

江戸時代、信州一の「繁盛の地」と言われた城下町松本が全国へ販売した特産品や、松本に運ばれた各地の特産品を紹介し、「商都」としての松本の賑わった様相を探ります。

会 期 1月6日(火)～2月8日(日)
(1月13日・19日・26日・2月2日は休館)
会 場 時計博物館3階 企画展示室
観覧料 無料(常設展示は有料)

関連事業

講演会 「東西の十字路 松本を中心とする
流通 ～江戸っ子を魅了した信州
の産物～」

日 時 1月12日① 午後2時～3時30分
会 場 本町ホール(時計博物館4階)
講 師 前澤健氏
(長野県立歴史館学芸員)
聴講料 無 料
定 員 80名

あとがき

民芸館の初音づくり、毎年楽しみにしている方も多いようです。昨年、千年紀で話題になった「源氏物語」にも、お正月の「初音」の帖があります。その題は、
年月を松にひかれて経る人に 今日鶯の初音聞かせよ
という歌からとられたそうです。みなさんも、手作りの初音で春を呼んでみてはいかがでしょうか。(M.K)

歴史の里から ☎0263-47-4515

草木染め体験

期日と染色材料

2月7日(土) 紫根
3月7日(土) 紅花
時 間 午前10時～11時
受講料 1,000円
持ち物 染めたい布類1点(綿、麻、絹など)
*歴史の里で購入もできます
エプロン、ゴム手袋、ビニール袋(持ち帰り用)
定 員 10名
申込み 3日前までに歴史の里へ

裂き織り体験

期 日 3月12日(木)
時 間 午前の部 10時～正午/午後の部 1時～3時
受講料 ティッシュケースサイズ 500円
ペンケースサイズ 1,000円
持ち物 はさみ、裂き織りにしてみたい布(お持ちでしたら)
定 員 午前・午後とも各10名
申込み 3日前までに歴史の里へ

松本民芸館から ☎0263-33-1569

企画展 「台湾・アイヌの工芸品展」

アイヌの衣装や木工品、台湾の華麗な衣装や織物、胸飾りや帯・肩飾り等の装飾品、祈禱箱、竹や籐の編組品等約200点を展示します。

会 期 2月22日(日) まで(月曜日は休館)
観覧料 通常観覧料
(大人300円、中学生以下無料)

体験講座「やしょうま作り講座」

日 時 2月1日(日) 午後1時～3時
会 場 下金井公民館(松本民芸館向かい)
講 師 横山律子氏
受講料 500円(材料費・指導料)
定 員 20名 要申込み(定員になり次第締切)
持ち物 手拭・タオル、エプロン

お知らせ ①

松本市立博物館は、
1月2日(金)午前10時から午後3時まで
新春無料開館いたします。
恒例の福袋と七福神ピンバッチを販売
します。ご来館をお待ちしています。

お知らせ ②

四賀化石館と安曇資料館は、冬期休館中
です。なお、四賀化石館は2月1日(日)から
開館いたします。

あなたと博物館 No.160

発行年月日/平成21年1月1日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL: http://www.matsu-haku.com
e-mail: mcmuse@city.matsumoto.nagano.jp
印刷 川越印刷株式会社